

住環境と人間性に関する研究（その3）

均衡教育としての家政学

The Study of Living Environment and Humanity Part 3 Home Economics of Balanced Education

樋口 眞基子*
Makiko Higuchi

I はじめに

身体に異常を感じた時、病気ではないかと不安になる。精神が肉体を支配していれば病気になるはずはないと固く信じ込んでいる、一方で過信は禁物と注意を促される。

病院へ行って医者に症状を訴えて診断の結果、「すぐに直ります。」と云われて安心する。最近特にストレスが原因だと云われる人が多い。ストレスは複雑な社会の仕組みや人間関係を維持していこうとする心に対して体が対応できない場合肉体に異常を感じる。つまり心と体の調整のために肉体の栄養素を大量に消費するので十分に栄養素が供給されないと肉体の維持機能に異常が起こる。栄養素が不足してバランスが崩れた結果であるということが、肉体の健康の方程式でいうところの栄養素と酸素、血液循環の良好さを確認するに至らせる。

現代、近代医学が病気を治す対処治療であって健康を目的とした治療ではないといわれているように、病気ではないがどうも体調がはっきりしない半健康という人が8割もいるようだ。日頃、健康を守り、つくるという意識に正確な知識が吹き込まれていない。病気や健康に関心を持ってどその仕組、内容等の知識の習得が難しいから医者任せになる。だから異常を感じると

その症状を薬で治そうと薬局で薬を買い飲むか、病院へ行って注射をして新しい薬を貰って対処する。病気は直るが、健康であるという自信は回復しない。又、中には薬の副作用で病気が病気をつくる始末である。

現代病が「感染する病気」から「つくる病気」へ、医源病であるといわれるゆえんはこんなところにある。肉体は目にみえる栄養素である食べ物と水、目にみえない光と空気が血液循環作用によってつくられているのであるから食生活の累積によって現代病がつくられているという重大な指摘を見落としてはならない。

最近の生活環境の変化はめざましい。特に食品に含まれている栄養価の変化は、農薬、化学肥料、ハウス早成栽培など人工的栽培方法によって引き起こされたものである。昭和34年以後の食品の栄養成分が質・量とも大きく変わったといわれる。新鮮な食品に代わって加工食品・機能食品という多種の食品添加物の混入と共に食卓にのぼるようになった。それらは健康を維持・増進させるところか、肉体に添加物や薬の成分が残骸として沈着し害になる。

生活環境の自然から受ける恵についても認識を改めなければならない。私たちが飲んでいいる水についても、いろいろな薬品によって加工され、自然の水とはほど遠いものになってしまい

*住居学科

酸性化している。こんな弱酸性の水を毎日飲んでいれば、健康がどのようになるか知れる。又、空気の汚染にしてもご承知の通りである。

このような環境の変化が肉体の代謝を微妙に狂わせている。特に酸素と必須栄養素の欠乏が細胞の新陳代謝を異常にしている。これが現代病の根本原因である。

病気になると医者がすべてを知っていて、その上で治療を行っているといふと医者を空だのみするように、食品に関する厚生省の認可についても同じである。今年3月、消費者連盟が食品添加物の認可について問い合わせたところ「食品衛生法というものは食品の為の法律で個と個人の健康を守るためのものではない。」と明確に答えられたそうである。

ここに大きな生き方の反省が問われている。他律的な生き方が問題である。医者も厚生省も個と個人の健康の維持・増進とは全くかわりがない任務なのだということ。

健康を維持・増進するのは全く個人と家庭の責任であるという認識を再確認する。

世界保健機構（WHO）で定める健康とは身体的、精神的、社会的に良好な状態である。そして人種、宗教、政治的信念あるいは社会的条件の差別なく各人の基本的権利であると謳っている。

しかし世間一般では「健康がすべてではないけれど健康がなければすべてはない」というような肉体の健康の基盤がなによりも第一条件である。確かに「健全な肉体に健全な精神が宿る」と誰もが自分で自身の健康に頼れないほど不安なことではないし、肉体の苦痛は感情的な発言や行動の原因にさえなるから健康を願うはずであろうと考えるが、しかし現代の日本人は8割方自分の健康に自信がないといっても当面苦痛がなければ、持病とか体質だからといって根本的な原因を追求することをせず、正常な、理想的な健康状態を試みる注意が稀薄である。

いうまでもなく身体と精神、社会は個々が単独に存立しているものではない。心と体が未分化であるように社会は個の集合体であるから、

個人の心身の健康が社会の健全性に反映していることを否認しない。

丁度、現代病が肉身を構成している最小単位の細胞が正常に生きていけないという事態であり、肉身全体という大まかな概念では到底対処できないから、細胞レベルで考える新しい医学が起こってきているように、社会の健全は社会全体を構成している個と個人の心身の健康を真剣に維持していくことに始まるのである。

社会の秩序を構成する最小単位は家庭である。しかし家庭の責任を指摘されても、その対策はとなると定かでない。再度、個人・家庭・社会の位置とつながりが正常に機能するという健全性における責任について語られ考えられる風潮をつくらなければならない。

II 課 題

家庭を対象とした学問が脆弱だから人間社会を構成する思想である倫理の育つ基盤としての家庭に変化が起きたのである。

家庭は生命を存続させ、生命を生み、それらを保護する本能的能力を維持、管理、処理という主体的理性で機能させるところである。この機能こそ責任の内容である。社会を構成していく個人が家庭で訓練され学ぶのである。

このシステムは社会に通じる。だから家庭の完全な成熟が必須的な課題であると考えられる。家庭が正常に機能しているならば社会を正常に機能させる能力が育つ。

家政学会では家政学を「家庭生活を中心とした人間関係における相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践総合科学である」¹⁾と定義づけている。

しかし、現状の家政学会の活動が家庭の福祉に貢献してきたといえるだろうか。否、多くの家庭崩壊は何を意味するだろう。家政学研究の実状をみてもこの定義とはかなりかけ離れている分野、研究が多いと指摘される²⁾声が多

い。

家政学の目的が人間生活の向上にあるとしながらもその具体的目標のすべてを実現する社会に至っていない。工学・農業等の技術的領域の進歩・革新の影響で生活技術の向上はあった。しかし「生活」という総合的性質の向上を実感しえ得ない。

つまり、家政学の独自性である基礎的・理念的研究が発展することがなく、技術的教育に力点がおかれ、進歩史観的な成果だけを評価してきたからであろう。

時代の要請の中で人間存在の基礎としての家庭生活を研究対象にしている責任を真摯に問い直す必要がある。家政学についての課題と方法を再考する為に、ここ5年間の家政学雑誌に掲載された『家政学を考える』シリーズをみると、大半が家政学の成立史に立脚し、その中で意義をみい出そうとするのが常である。

そんな状況の中で家庭生活がどうあるべきかを思いめぐらす時に人間が創造された意味を再考させられる。人間は何の為に生まれてきたか、人間が創られた目的を成し遂げる中で起こる諸問題の中で、夫婦を中心として展開する家庭の事情を整理し、愛を体験する家庭をつくることこそが真髄であるのではないだろうか。

又、人間が小宇宙といわれることに着眼して人間の実体相のどの側面を科学、宗教が扱ってきたのだろうか。つまり人間の諸相がその性質として現れている学問になりえて扱われてきているのだから、人間を対象にする研究はその諸相の総合体としての人間をいつも評価するべきであると考え。

そこで諸相として現われた科学と宗教の相違点と特徴を把握し、部分と全体の関係の見方を通して小宇宙といわれる人間の実体相に照合してみる。家政学が自らを総合科学として定義づけているが、ただの各研究の寄せ集めであってはならない。人間の実体相が心、思考、体のバランスで成立している。その全体の機能と性質、作用の関係を明確にすることによって、そのバランスを理想の状態にもっていくために家政学

が家庭生活を中心として人的・物的の両側面から総合性をめざす研究をするという意味を考察することが目的である。

Ⅲ 考 察

1. 価値観の移行

現代という時代は価値喪失の時代である。地域紛争は絶えることなく、テロ、破壊、放火、殺人、麻薬中毒、アルコール中毒、性道徳の退廃、不正腐敗、搾取、抑圧、謀略、中傷、家庭の崩壊等数え切れない悪質な現象が世界に蔓延している。このような大惨事は、人類の貴重な財産、歴史的建造物といった人工的環境を破壊するだけでなく自然環境、いや人間関係をも大混乱にしている。人間相互の信頼性の喪失、父母の権威、教師の権威、政府の権威の失墜、人格の尊厳性の喪失、伝統の喪失、生命の尊厳性の喪失など。このような喪失をもたらした原因は何であろうか。共通に認識していることは伝統的な価値観を疎じる傾向に時代が動いてきたということであろうか。いわゆる流行は民主主義の思想と科学万能主義一辺倒へと向変した。価値観を意識的に崩壊したということである。つまり真、善、美に対する伝統的な観点が失なわれてしまったということもその一面であろう。なかでも善に対する観念が稀薄になり価値観が急速に失われている。それではこのように価値観を崩壊に至らせた原因は何であろうか。

伝統的価値観は宗教を基盤として成立しているために、この基盤が失われて価値観は廃れた。価値の主体が宗教から科学へと移行したからである。つまり社会を構成し、社会がどのように動いていくかということについて、小さな社会、自然民族と呼ばれている社会の中では宗教の専門家やシャーマンが共同体の指導者に政治的指示を与え、政治家はその通り共同体を動かしていくということと照らしあわせると、近代社会といわれる現代の社会では科学者がそれに近い役割を果たしている。政治家ばかりでなく大衆も科学的真理に基づいて行動している。

現在の社会では科学的な真理というものを追求し、それを知ることによって安心している側面がある。この安心の内容の質については問わない。しかし、外見上そういう働きを科学がしている。たとえば、雪が融けると何になるかと理科の授業で先生に聞かれて、小学生が春になると答えた。これでは先生は満足しない。雪が融けると水になるという科学的な考え方をしなければいけないと先生は小学生にたたきこんでいる。これが当然であり日常的にそうやって「おまえはなかなか科学的な考え方をしている」「それは科学的でないよ」とか、常識的な言葉で云えるように我々の言葉の中で科学というと、ああこういうものだと区別している。

ところで歴史の流れの中で、サイエンスは科学でなくて、文字通り知識である、キリスト教的な知識も含めた知識であった。それがどの時点で現在言われているような科学に変わったかという18～19世紀に変わっている。その背景は結局、大きなキリスト教の信仰体系を破壊し無くしていく啓蒙主義者たちの主張が学問を変えたのである。もともと物理学・生物学・化学、あるいは政治学・社会学・哲学というものが細かく一つ一つあったわけではなく神学的哲学という一つの有機的体系であった。この哲学部と称されるところでキリスト教的な一つの大きな知識体系を学ぶ。これは一つの大きな学問、専門的学問をするための基礎的な教養であると、これらを学んだ上で携わる職業は、キリスト教の「召命」によって仕事化される。それに対して19世紀に出てきた知的職業である科学者は、人間理性に基づいた真理を追求する非常に重要な役割を果たしているのだと宣伝した。そして科学者は自分たちの伝統性を訴え始めた教会と関係のあったニュートンもガリレオもコペルニクスも科学者なんだという歴史観が生まれるに至った。つまり近現代では科学が宗教のかわりをしている。それらの人達が実は信仰の枠組みの中で自分たちの知識を考えたのと同じように、科学者はそれを人間の理性と置き換え、科学的真理と置き換え、発見を人間の唯一の拠り所とす

るようになったのである。

日本では明治の10年代に「科学」という言葉が使われるようになる。その後の経過の中で科学は「自然科学」を代表し、科学と呼ばれるものは自然を対象にしている、人間の理性だけを使って、感性や情緒などが立ち入ることを拒否する、極めて冷たい、そういう客観的な知識体系として科学というものをイメージすることができるように次第に出来上がっていくプロセスが19～20世紀にかけて起こっている。

人間が依って立つ最も重要な基盤であると主張することにおいて科学が自立した。人間の理性というものに対して信頼があり、神によって保証された真理を人間の理性によって保証される真理と読み換えた。人間の理性にさえ訴えていけば人間は確かな歩みをすることができるという一つの世界観を科学者が作りあげた。その力が社会の中で働いたのである。

近代化はそういう意味では宗教的な桎梏から人間を解放するという啓蒙近代の理念で考えている。近代化という言葉の中にはそういう旧制度から人間を解放し、人間の理性だけに頼って人間をつくり上げることである。ヒューマンズムという人本主義を引き起こし唯物史観を成熟させた。人間そのものを信頼し超越的なものでなく、人間の中にしか絶対というものはないのだというのが啓蒙主義であるから、宗教を否定するという意味がわかる。

しかし今150～200年間、理性と人間に対する信頼に基づく実験をやってきて、人間の理性というものが絶対的に以てできる価値なのかどうかということに対して今、反省し考え直しつつ時代にあるのではないだろうか。

少しゆるやかな形であるかもしれないけれど、人間を超越したものに対して、超越的な価値に対して超越的な価値を与える何かに対して、我々がもう一回、目を開くということ、その中に科学的知識を位置づけられ、バラバラなものではなくて、そういう状況というものへと向かうのかもしれない。

このような伝統的価値の崩壊の現象を歴史的

に見るとき、何か新しい価値観の確立が必要であろう。時代はそのような流れの中にある。

2. 価値と欲望

①西洋の価値観の変遷

古代ギリシアにおいて、ソクラテスやプラトンが真の知を追求し、絶対的な価値を確立しようとした。しかしポリス社会の崩壊と共に、ギリシア哲学の価値観も崩壊してしまった。次にキリスト教が神の愛（アガペー）を中心として絶対的な価値を確立しようとした。キリスト教の価値観は中世社会を支配したが、中世社会の崩壊と共に力を失ってしまった。

近世に至ると、デカルトやカントはギリシア哲学と同様に、人間は理性によって情念を支配しながら、確固たる意志をもって行為すべきであるという理性を中心とした価値観を確立した。しかし価値観の根拠となる神の把握が曖昧であり、その価値観は絶対的なものとはなりえなかった。パスカルやキュルケゴールは真なるキリスト教の価値観を復興しようとしたが確固たる価値観を確立するには至らなかった。新カント派が価値の問題を哲学の主要な問題として扱ったが、価値を扱う哲学と事実を扱う自然科学を完全に分離してしまった。その結果、今日の多くの問題が生じている。科学者が価値を度外視し

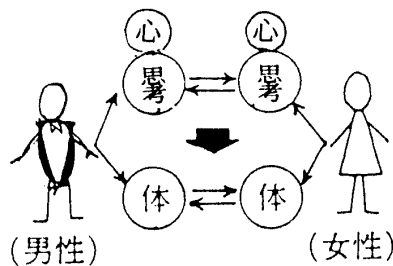
て事実だけを研究した結果、例えば人類を大量殺戮する兵器の開発、自然環境の破壊、公害問題などをもたらすに至った。

伝統的価値観は脆弱化し、自然科学から分離され、ついに哲学の領域からも排除されようとしているのである。そして、今日、社会的混乱の中にある。ここに伝統的な価値をよみがえらせながら価値評価の基準を相対的価値から絶対的価値観に移し確立することのできる新しい価値観が考えられなければならない。価値と事実の関係が一つになればそれが絶対的価値というものであろうか。

②価値について

そこで次に価値と事実の関係についてみる。図1のように私たちの心と体とは内と外、原因と結果、主体と対象、縦と横などの相対的關係をもちながら、事物において内性と外形が統一されて一つのものになっているように、価値と事実も本来一つになっているはずである。

たとえば、価値には物質的価値と精神的価値がある。物質的価値とは商品の値打ちのように生活財源としての価値を意味し、精神的価値は真善美のような知情意の機能に対応する価値をいう。価値とは、主体の欲望を満足させる対象の性質のことである。すなわち対象があって、それが主体の欲望や願いを満たす性質を帯びる



欲 望		現 象	
・内的	(心, 精神に関する)	外的	(体, 物質に関する)
・原因的	(ある状態や事物を起こすもと)	結果的	(ある事が基でそうなる)
・主体的	(命令, 指示与える, 自分の意志で行動)	対象的	(命令, 指示の目標)
・縦 的	(立体的, 原因と関係する超時空的)	横的	(平面的, 原因と関係持たぬある時空圏内)

図1 欲望と現象

とき、その主体が認める対象の性質を価値という。つまり価値は対象価値であるが、主体に認められなければそれは現実のものとはならない。たとえばここに本来美しい性質の花があったとしても、主体がこの花の美しさをみきわめなければその花の価値は現れないのである。このように、価値が現れるためには、主体が対象の性質を認めることによるのである。つまり主体と対象の関係が主体の欲望の基準に左右されるということだ。

③主体の欲望

価値を論ずるためには、まず主体が潜在させている欲望について分析する必要がある。何故ならば今日まで、価値を扱うすべての思想は人間の欲望の問題を排除して現象ばかりを扱うことが客観的な知見だと考えてきた。しかしそれは根のない木や土台のない建築のように破壊をまぬがれえなかった。根のない木は何れ枯れるしかなく、土台のない建築は壊れるしかないのである。だから、既存の研究における思想体系を扱うものではいろいろな社会問題の解決において説得力のなさを露呈しているのである。たとえば環境と経済のジレンマにみるように、物

質的価値を扱う経済理論でさえ、現在の経済の混乱現象を解決するのにあまり役立っていない。また、文化人類学者が、未開社会に入り込んで調査をする場合にも彼らが持ち込む物質的価値（眼鏡、テープレコーダー、ワープロなど）によって原始社会は汚染されている。文化人類学者等の観察・観測こそが、その対象である原始社会を破壊してしまう。これは主体の欺瞞性があるからではないだろうか。つまり、主体の欲望を正しく分析しなかったために起こる多くの困難な問題が、対象に対する観察の独立性を成り立たせないという誤ちを犯す。経済学者についていえば経済活動の動機が欲望であることを知りながら、その欲望を分析しなかった結果、結局、彼らの理論は崩れた。現象を正しく理解するためには欲望の分析がかなり重要であることがわかってきている。

そこで、既存の思想体系である倫理学³⁾では、動機（欲望）をどのように扱っているか表1に示す。ここでは日本で通用している代表的な「倫理学の観念」と「倫理学側からの正式回答」と比較している。結局は、強制の範囲を決めることが倫理学の最大の課題であるという。表1の「倫理学側からの正式回答」では範囲を広く

表1 欲望—良心と思考

日本で通用している代表的「倫理学の観念」	倫理学側からの正式回答
①法律や制度は多数決によって決定されるのだから多数決の範囲を決めることはできない。法律上の処罰に依存しないで、自覚にもとづく自発的行為が倫理学の対象になる。	①権利という形で多数決の可能な範囲を決めておかないと、法律や制度は多数決によっては決定できなくなる。
②倫理問題では、個人の価値観は違うのだから強制はできない。	②法律上の処罰の範囲を決めないと、自覚にもとづく自発的行為の領域も決まらない。
③行為は、動機が純粋でないと倫理的とはいえない。	③法と制度の前提となる倫理問題では、個人の価値観の違いを前提にして、強制の範囲を決定しなければならない。
④エゴイズムを否定することが倫理的態度である。	④行為は、結果が無害であれば正答であり、動機の純粋さは客観的評価の対象とならない。 ⑤エゴイズムの許容限度を決定することが倫理学の課題である。

とっている。できるだけ個人の自由を尊重しなければならないと弁護し、倫理学の目的は個人のエゴイズムを保護することのようだ。行為は結果が無害であれば正当であり、動機の純粋さが客観的評価の対象とならない。つまり観念（内的・良心）は動機の純粋さが行為の倫理感であるが、欲望（外的・思考）では、そうではない。内的原因（理知・宗教性）と外的結果（理性・科学性）が矛盾する。これが日本の知識者階層の心の二面性である。

④全体目的と個体目的

三つの創造目的に従って、人はこれを何故か達成しようと内的衝動にかられるのである。

環境問題にふれる時「文明のイデオロギー」という近代特有の原理の働きを無視できない。人間による自然の徹底した支配、改変、征服、搾取が、ヨーロッパの歴史的背景としてのユダヤ・キリスト教思想に淵源するという主張が多くなされてきた。先項でもとり上げたようにユダヤ・キリスト教の人間中心主義、神の被造世界の中で、特に人間が神の似姿として造られ、かつ神から万物の支配を託されたと解釈してきた考え方を訂正する必要があると反省の声が聞こえてきている。しかしキリスト教圏でない日本が環境問題と無縁かというところではない。18世紀以後の思想の中で神はいない。人間こそ主人であるという歴史を導くのも、救済をもたらすのも神ではなく人間である。人間を支配するのも人間であると。ところが、自然に対する人間の介入はあってもそこにははっきりした限界がある。気候や気象による災害等を思い起こせば、それらが人間の制御の外にあり、ごく僅かな範囲で人為的な操作や制御が許されていたまでである。今や人間は自然を収奪し搾取できないことを知り、歴史をふり返り、神・人間・被造物の関係の中に人間の創造された目的を改めて思いめぐらすことになる。

かつては神のご計画の全貌を人間が理解しきっていたかどうかかわからないが、神との対話の中からすべてを起こしてきた。つまり、神の似姿

として創造された人間は、被造物が成長側にある場合、原理自体の主管性、または自律性によって成長するように（植物は自律性（生命）に従って、動物は本能に従って）経過することによって完成していく。ところが、人間は原理自体の主管性や自律性だけではない点が他の被造物と違う。すなわち、「それを取って食べると、きつと死ぬであろう」という聖句にみられるように、そのみ言は神側の責任ではなく、人間自身の責任がそこに生じていることを意味する。人間が完成するかは人間自身の責任遂行いかんによるのである。人間が責任分担を完遂することによって、神の創造性まで似、人間も創造主の立場で被造物を主管することができる主人の権限をもつようになるはずであったのだろう。ところが、神の支配の構造だけは受け継ぎながらも神を否定し、その位置に人間を据えた結果、自然に対する神の支配は人間の支配にとって変わったのである。自然と人間が分離し、それを扱う学問も分化・分離が生じたという根源的原因がある。

神とは欲望の源泉である。時間と空間を超越して永遠に自存する絶対的なものであり、被造物が存在するためのすべての力（生存・繁殖・作用）を発生せしめる力の根本である。この力は縦的な力であり、相対基準を造成して価値を見出す関係をつくり出す力は横的な力である。第一創造された目的は、この縦的な力を（神、法と呼ぶ）中心として、ある主体と対象（心と体）が良く授け良く受ける作用を交流させるならば合性一体化して、それ自体において、神、法の情的力と一体となる。その後主体の意のままにその価値（愛と美）を完全に授受する善の生活をするようになるはずである。

神が被造物の創造を終わるたびに見て良しとされたことと記録されている創世紀のみ言をみれば、神は創造された被造物が、善の対象となることを願われたと解釈してよい。それゆえに、人間を中心とする被造世界が存在する目的は、神を喜ばせることであつたと理解できる。すべての存在は二重目的をもつ連体である。全体目的と

呼ぶ目的は全体のためにあり、個体目的と呼ぶ目的はそれ自体のためにあるもので、この関係が原因と結果、内的なものとの外的なもの、主体的なものとの対象的なものという関係をもっている。それゆえに、全体的な目的を無視して、個体的な目的が成立するはずがなく、個体的な目的を保障しない全体的な目的もあるはずはない。表2に心と欲望・目的・価値を整理してみると全体的な目的は自己以外の人を喜ばせようとして価値を実現させようとする高度な欲求に支えられており、個体的な目的は自己の成長のために生き、自己の喜びを求めようとする欲求が強い。欲望とはある目的を達成しようとする心の衝動のことである。先に加藤氏が倫理学の課題はエゴイズムの許容限度を決定することであると指摘されている点はこの原因的欲望と結果的欲望の関係、全体目的と個体目的の二重目的の意味を見落としているからではないか。森羅万象の被造物は、このような二重目的によって連帯しあっている一つの広大な有機体である。

表2 心・欲望・目的・価値

	心	欲 望		目 的	価 値		
		内的	外的		原因的欲望	結果的欲望	全体目的 個体目的
内的	良心	原因的欲望	価値実現欲 価値追求欲	全体目的 個体目的	原因的 真善美	価値	
外的	思考	結果的欲望	価値実現欲 価値追求欲	全体目的 個体目的	結果的 衣食住	価値	

⑤価値決定の基準

ところが地球環境問題の所在を真剣に捉えようとする時に、今までの問題の立て方や解き方に依っていたのでは一向に明確にならないし、正確であるともいえない。どこか基本的に誤っているのではないかという問題意識に立つとき、さらに深いところに原因があるのではないか。先程の倫理学をリードする学識者の考え方の中で、行為は、結果が無害であれば動機の純粋さは対象とならないという共通見解の曖昧な性格づけに問題があるように思う。つまり動機の純粋さとはどういうことを意味するのか、意味に基準が設定されていない。そこがどうも問題である。日本人の間では目にみえない心の世界を

取り出たせてあれこれいう風習がないから、人の見ていぬ処では何をしてもよい。旅は恥のかきすて的精神がこんな倫理の共通見解の中にも帯びているのである。基本的な考え方の変換とは動機の段階からの反省が促されるところに諸々の問題の解決策の原因が解明できる。

主体のもっている思想、趣味、個性、教養、人生観、歴史観、世界観などが条件となって価値の決定には主観作用が働く。そのために、価値の決定は人によって異なるのが事実である。しかし主体的条件に共通性が多い時に価値評価にも一致点が多くなる。たとえば儒教の場合、「父母に孝行する」ことは普遍的に善である。このように共通の価値評価の基準が一定の範囲に局限されるとき、その価値基準を相対的基準と呼び、この相対的基準はある一定の時代に、一定の地域に、一定の指導者をたてて、その時代のその地域の人々を救おうとされてたてられた価値である。宗教は人類を救うために言語、習慣、環境の異なる人々に対して、それぞれに適した方法で摂理がなされてきたものである。

相対的基準の共通性を見出すことが絶対的基準となりうる共通性である。キリスト教のアガペー、仏教の慈悲、儒教の仁、イスラム教の慈愛が実践されて愛の真理に通じるものである。

宇宙のすべての存在は、二重目的をもつ連体であるということ、又人間は普遍性と個別性をもつ個性真理体である。したがって普遍的な善の基準は全体目的を優先させながら、個体目的を追求し、普遍性をもちながら個性を表わすということである。現代においては、共通性に光があたらず差異性がリードしている社会であるから、価値観に混乱が生じているのである。

3. 家政学のパラダイム

村上氏は家政学を以下の3点のように理解し、『地球家政学』⁴⁾を提唱している。

1, 自然科学と人文・社会科学とが混然となっている点である。それは人間の主体的活動からも目を離さず、自然現象を見据えている。

2, 理論と実践との間の相互乗り入れが非常に顕著で、そうした文脈のなかでの問題解決を目指している。

3, 19世紀以後に成立した生産工学や産業工学は、財もしくは物質の生産（消費）に学問の具体的な焦点を置いてきたが、それらとは違って家政学が問題にしようとしているところは、生産や消費そのものではなく、それらをも視野のなかに収めつつ、全体としては「家」をいかにうまく「保全」し「維持」していくか、という点である。

その特徴は、「家」全体を運営する姿勢の中に見られる内的性質にあると云われる。つまり、「家」では能率や効率に代って、融通や保全が一つの価値として主張され、家全体のなかで、極端な不利や不公平が生じないように、いつも流動的なスタンスが要求されている。唯一解の存在を初めから前提としないで、時間の経過のなかで、また家族員の間で、有機的な調和が保たれるような運営が目標とされている。考慮すべき事項は極めて多岐に亘り、それらのすべてを十全に満足させる決定的な解が存在せず、それでも実践の段階では、どこかで解を与え選択し、それを実現するための方法を考案し採用している。

このように、「家」は多元主義に立脚した時それぞれの価値体系のせめぎあい、唯一解を以て決着できるようなものではない。「家」を持続させるために、今はこの価値を多少は優先させても、それほど不公平にも不公正にもならないのではないか。時が満ちれば、先に少し我慢させた別の価値に優先権を譲ったとしても、それもまた不公平にも不公正にもならないのではないか、極めて曖昧で割り切れない解決を提案しつつも、どうにか実行に移していく。しかしその解決も「絶対」ではない以上、いつでも変更される柔軟な用意がなければならない。そうした解決を見い出すことを目的として地球家政学を構築することはできないか模索しているのだと。

村上氏は一つの標準を作って裁断し、標準の

下に統合しようとすることの誤りに対する^{スタンス}立場として多元主義を掲げた。多元主義はすでに「家」という集合体で培われているのではないか。ならば、その「家」の内的外的構造がさらにもまく機能し、地球という運命共同体の細胞核である「家」が保全され、維持されていくような仕組みを開発してはどうかと提案している。

「家」の内・外的とも洗い直しが迫られているのである。

①「家」「家族」という共同体を作用する責任

人間は誰でも本能的に自分を保護する。それ自身は悪いことではない。しかし本能的な保護力というものは生来的に自分だけを保護するものであり、自己以外つまり全体を保護するものではない。意識的に保護することを決断することが家庭という共同体の中では要求される。保護する立場にあるときは、犠牲になる。すなわち自分がマイナス（不利）の状況下に一時おかれる。だから人間は保護されることを好むが、保護することは好まない。犠牲と保護の関係のつながりの範囲が、狭くなってきている。今日、個人主義が横行し、自分のことばかり考えるのが普通である。人間の心と体、親と子、人と人、人と環境にしても、私という存在はそれらの関係の中で保護されている。人間が成長するために、食物や衣類、また住環境にしても、すべてが保護している。だから保護している環境を保護して返さなければ対等だとはいえない。これが原則である。自分を保護された後（した後）は、保護しな（されな）ければならない。

つまり、高くなった所は必ず低くなっていき、低くなった所が高くなる。それは波も同じ。気温も高くなれば低い方へ、空気が流れ、一体となって調和する。

このように存在するものは、平均をとって平等になろうとする。とすれば、保護される者と保護する者（犠牲になる）の隔差がある程、その時点より高まり、拡大する。自分のことに執着すると如何に、狭く小さくなっていくか、そこに働く力が必然的に少ないから、

自分だけを大切にするとところには、生理的欲

求に縛られた自己追求欲で、そこに生じた結果は個体目的を達成したまでである。身体の一部は全身のためにあるように、自分は自分のために存在しているというのは自分を産んだ両親・家庭の存在的意味を無視することになる。自分と家庭、家庭と社会、世界を想う思いへ発展するその情を育み、形成するところが家庭である。家庭で、人は自分が家族員の部分であり、家族という全体の繁栄、生存保護のために維持・管理・処理してゆきながら、連鎖環をつくっていく。その中で人間は喜びを知る。

この喜びは、自己の願い通りに展開し、実現したことを確認しては、それに満足し、生ずるものである。これは自己同一性的ともつながる本人の存在目的の証明でもある。特にそれが独自のでないから自体の為でなく、相対的に自己の内的存在を感ずることができる。この自己の内的存在は人間が創造された目的・動機につながっているからこそ、実体的喜びとして生じる。この体験は対象があって初めて可能である。家庭は夫と妻がお互いによく授け良く受けすることが、家庭の機能を円滑にする。作用してこそ子孫繁栄のための力が発生する。この過程こそ家庭の真髄で、人間関係の基本、模範を示す場であり空間であり時である。

②家政学が依拠する問題点

家政学の源流は古代ギリシアにある。ギリシア時代の価値観は唯物論的価値観、恣意的価値観、絶対的価値観への追求へと唯物と唯心の観点交錯を繰り返してきた。

人間は本性的に自由を追求する。又、人間は自由意志によって、自分の責任分担を完遂し、良心と一体となって個人性を完成することにより、人格の絶対的な自主性が帯びるように造られている。何か特別に神の啓示がなくても、理知と理性が一体化した時にその力が働き、生活するようになっていくので、人間が本性的に理知と理性を追求するようになる。人間はまた、自然界を主管するように構成されたので、その原理原則は科学により探求され、解明され、現実生活の環境を自ら開拓していくのである。し

たがって人間は本性的に生活の現実と自然と科学を追求してきたのである。

しかるに、背景である時代の特殊な環境によって本性が抑圧されることによって、外的な欲望か内的な欲望のどちらかが強く刺激された結果、運動として展開されてきている歴史がある。

たとえば、人間本性の外的を追求した運動は人本主義を生み出した。ギリシア文明圏は、この人本主義のヘレニズムを指導精神として形成されたのである。人本主義とは神の帰依と宗教的な献身を軽んじ、すべてのことを自然と人間本位のものに代置させた。神から離れて理性を重要視する合理主義思想と、経験に基盤をおく人間中心の現実主義思想は、共に神秘と空想を排除して、人間生活を合理化しながら現実化し、自然と人間とを神から分離させたのである。

前章で論述したように、18世紀に至っては、歴史と伝統を打破して人生のすべてを理性的または現実的にのみ判断し、不合理なもの、非現実的なものを徹底的に排撃し、神を否定する合理的な現実性にのみ重きをおくようになったのである。このような経験論と理性論を主流として発展した啓蒙思想が、19世紀には、無神論と唯物論を集大成するに至った。

家政学はこの思想の中で19世紀末に成立している。日本の家政学の目的はヨーロッパに根づいているような絶対主義的な個別科学の確立をめざす科学論としてより、アメリカの流動的で実利的な社会の進歩に適應する原理を焦点におく現代科学論に影響を受けている。

たとえば1901年のL.P.C.会議で掲げられた目的は『次世代が現在より高い水準の生活を営むために家政学の促進を図ること』、1909から1929年の間に『ホーム、施設や地域社会の改善向上』、1944年、『あらゆる手段、方法を用いて家庭生活の向上を図ること』、1959年は『ホームの改善』に徹している。さらに1960年、『ファミリー・リビングの改善』、1979年、家政学の究極の目的は『家族ならびに個人の生活の質的向上』へと微妙に移り変わってきた。1902年に掲げた定義によれば、「ホーム・エコノミックスは、広

義に見てさまざまな法則・条件・原理や理想について追求する。それは一方では人間に直結した物理的環境について、また他方では社会的存在としての人間の本性について追求する。この両者の相互関係を究明する科学である。狭義には家庭生活における実際の諸問題を解く科学である」と。

日本の家政学会はこの定義を実践性の強化（経験論）と解釈し、対象を現実にあて対応手段を見出ししていくための追求として、実践的総合科学（理性論）の必要性を問いた。その結果、狭義の個体目的が幅をきかせ、広義の全体目的がなおざりにされ発展、追求されず斜陽化を招いたのである。必然的な結果である。

③家政学の機構

人間は万物を主管するさいに、被造世界に秘められている原理を探求し、科学を発達させて、外的・肉的な無知を完全に除去できることが、まず理想社会を築くための前段階として科学社会の建設が求められたのである。一方で内的・心的な無知に対する克服は、宗教が担当してしかなるべきである。

家庭は理想社会の細胞である。社会の核であるひとつひとつの細胞が内的・外的共に正常であることが重要である。

ところで、理想社会の経済機構が、完成された人体の構造と同様であると考えられるように、家政においてもそうでなければならない。

生産と分配と消費と廃棄は、人体における胃腸と心臓と肺のように、有機的な授受の関係をもたなければならない。生産過剰による破壊的な販売競争とか、偏った分配によって全体的な生活目的を害する蓄積や消費をしてはならないのである。ゆえに、必要かつ十分な生産と、公平にしてしかも過不足のない分配と、全体的のための合理的な消費を、統合化のための（物質・自然）循環をしなければならない。

現在の家政学の研究領域からは何も成果は期待できない。まさに、これらの形成は経験的に積み上げられた総合であって、目的にあった統

合のための分科研究でないからだ。

④普遍教育を基盤とした科学教育

教育理論には二つの側面がある。一つは教育の理念、目標、方法等に関するもので教育哲学にあたる。他の一つは、客観的な立場で教育現象を扱う側面であって科学教育という。この二つの関係は教育哲学が原因的教育であり、科学教育は結果的教育である。

個別教育は心情教育及び規範教育を基盤として、それらと併行して行われなければならない。知識教育も、技術教育も、体育も、心情（愛）を根底にした規範に基づいて初めて健全なものとなり、創造性が十分に発揮されるようになるからである⁵⁾。

心情教育と規範教育は同時に受けなければならない教育で普遍教育と呼び、それに対して科学教育は、個人の資質によって学ぶ領域が異なるから個別教育という。

普遍教育と個別教育は原因と結果、主体と対象の関係にあたり、均衡して行わなければならない教育である。心情教育と規範教育は精趣的な教育すなわち心の教育であり、科学教育は万物を主管するための教育だからである。

かつての教育は完全なものではなかったが、愛の教育があり倫理教育があった。しかし今日、それらが軽視されるようになって知識偏重、技術偏重のいわゆる不均衡教育が行われている。その結果、人間性の健全な成長が妨げられている。均衡教育によって科学技術を正しい方向に導いていかななければならない。

教育の原点は家庭教育にある。この家庭を研究対象にしている学問が家政学であるから、その教育理念と目的の確立が求められている。特に心情教育と規範教育を基盤にした教育方法を提案、改革する必要がある。

⑤家政学の研究対象

目的とは理念に基づいて存在するものであるが、家政学における大学教育充実のための指針の報告書⁶⁾によれば、家庭生活を中心とした人間の生活から広く人間生活そのものを研究対象とする移行が進んでいる。また、生活行動の

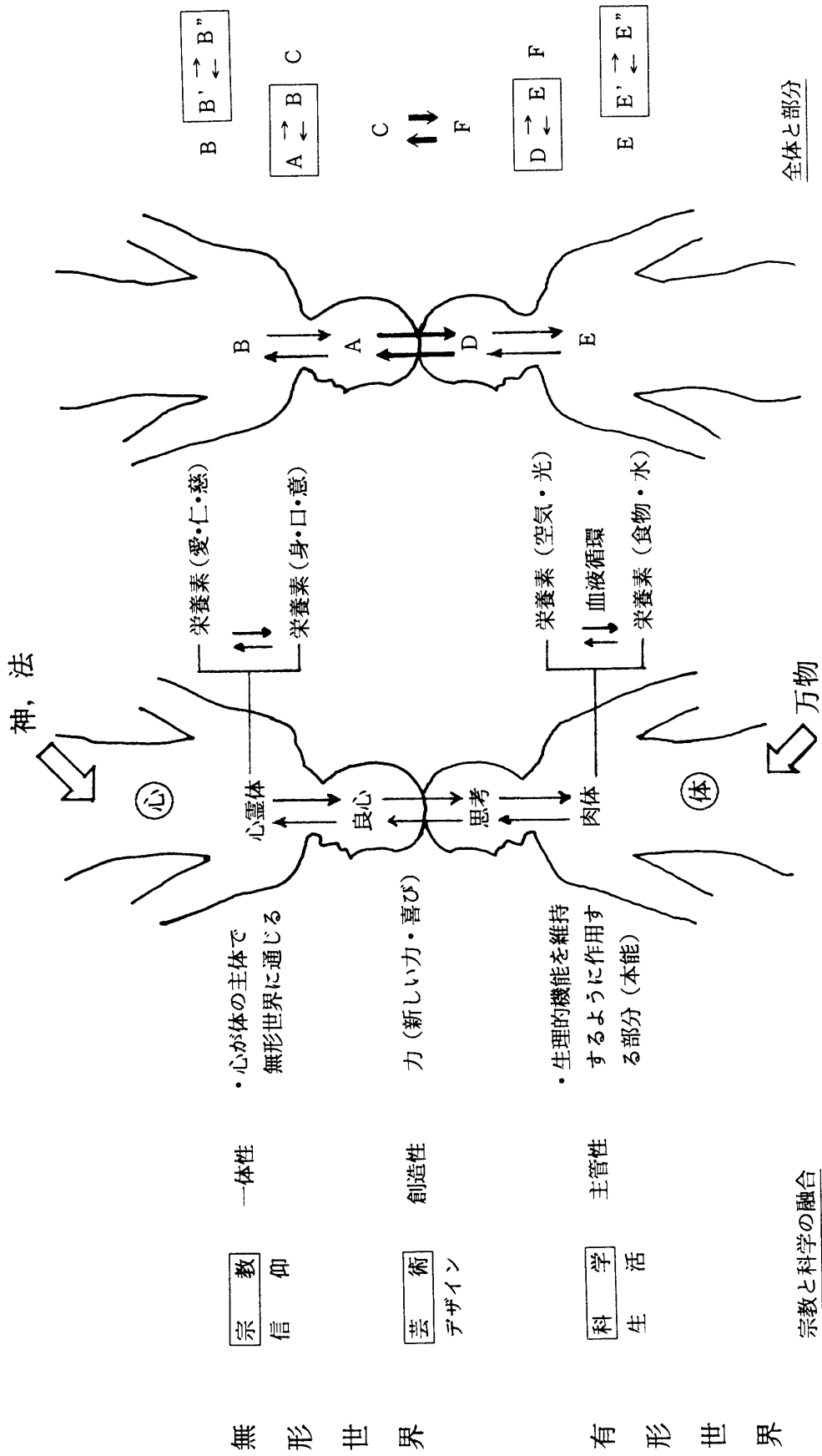


図2 人間の実体相

意義を文化の視点から探求することが重視されるようになったことであると記述されているが、科学に対する宗教とははっきり打ち出さず、文化といって人間の欲望を扱おうというのではないだろうか。

ますます、曖昧な、不明瞭な目的になってしまった。存在するものの根本原理が本性的に内的・外的の両性から成り立っているということ認識するに乏しいからである。

まず、家政学の対象は家庭生活におくべきである。何故ならば、根本的に個人の完成、家庭の完成の順番で成し遂げられてこそ、万物を主管する責任が荷せられるのであるから。

個人完成は規範教育と心情教育を受ける段階で確立していく。したがって家政学は生活していく為の普遍教育としての位置づけが必要である。

家庭を中心として家族員間の相互の授受関係によって心情を育くむことができる。この心情教育が意図的になされるかどうかは、後に欲望の追求がどこから起こるかという点で非常に重要な心情圏を形成する。その意味で家庭を運営する機構は社会性の基盤であるから、家政学の研究対象を家庭から世帯へ移行⁷⁾しようとするのは、肉的（生理的）充足だけを求めているからではないか。肉的生活の現在的意味を知らないからである。

家庭と住まい（生活のはたらき）のどちらを主体にするかという時、家庭は魂が宿るところであるが、住まいは器としての物としてみるという違いがある。

人間が霊的存在であることを無視できない。住宅は動物的生活の根拠地であり魂の安まる場所でなくてはならない。

多くの家政学者は、人間は肉的生活だけで成り立っていると考えているのだろうか。家政学の定義は肉的生活の向上をめざすのであって家庭の正常化・健全性をめざすところまで一致した見解がない。

IV まとめ

本質において科学と宗教は人間自身の特性である。人々の中の宗教的世界観は生きており、科学はその世界観を否定も、確証もしない。つまり、科学は非物質的な現象を研究しない。これらの現象は科学の領域に入っていない。科学の見地からはそのような現象は存在しないと云うことも可能である。しかし反対側（宗教）からは、同じ権利をもって科学はこれらの現象に関係がない。これらの現象は科学の外にあるからだといえる。まさにそのために、科学は宗教を否定しないし、確証しないといえよう。

歴史上、教会と科学の闘争を若干の事例を試みることができるが、宗教と科学は本質的には衝突していない。

宗教も科学も具体化されるのは人間によってである。人間のために、人間の名におい存在する。なぜならば、両者は人間精神の別々の分野をカバーしているからである。人間精神とは心と体を操作する原因に相当するものである。心を主管する宗教的性質と体を主管する科学的性質とでもいおう。良心と思考それは宗教と科学が一個の人間の实体相に現れたものである。否、宗教的世界観と科学的観念が個人の中に全く静かに共住し、存在しているのが偶然ではなく、組み込まれた人間精神の特性なのである。

だから、同じような調和が家庭・社会でも起こって当然なのである。

そこで個人にあっては自己管理をする責任が果せられているのである。この宗教性と科学性を融合させながら創造性を発現するように創られているのである。

一般に肉体の健康管理には関心がある。しかし魂と心と体の三位一体の維持・管理については重要性を感じていない。被造世界における人間の位置を正しく認識していないからか。たとえば、象を見たことのない人を集め、目隠しをして象に触れさせて、象とはどんなものであるのかを云わせるようなものだ。象の牙に触れた者は、象は大きな人参のようだといひ、耳に触

れた者は、扇のようなものであるといい、鼻に触れた者は杵のようなものであると答えるだろう。誰として象そのものをとらえ得た者はいない。人間を見識しているのもこれと同じで、一部分に触れることで全体を見通しその本性をいいてあてることは難しい。

そこで個人の経験に学ぶことは愚かであって歴史に真理を見出すのである。

図2に人間の実体相を示し、有形世界の体と無形世界の心の仕組みを明らかにする。有形世界で、肉体の異常の原因が酸素（空気と光）と栄養素（パンと水）、血液循環にあることが根本である。基本的にはその血液循環が内的・外的に正常であるならば肉体は健康である。思考はその肉体に影響を受けることになる。体は肉体と思考の相対関係を結び作用する。無形世界である心においても内性と外形が維持・管理処理されている。肉体の血液を中心にして酸素と有形の物質である栄養素が作用すると同様に栄養素の循環によって成立している。その栄養素が宗教性を帯びた神の愛・仁・慈悲・法等々として感得できるものであり、それに対して体が実生活で実際に行い感じた感覚との相対関係の作用が心をつくっていく。良心はその心霊体に影響を受けることになる。

肉体の異常の根本原因が、栄養素の欠如や栄養素自体の質の程度によって肉体の正常が維持されるのである。これは心の心霊体についても同様な機能が成立し、維持されてこそ正常だといえる。

人間の実体の部分の個体目的はそれぞれの維持機能であるが、その個体の連鎖が全体を形成している。人間の実体は人間の本性に仕組まれた全体目的のために融合していくように出来ている。

存在しているものは、いかなるものであってもそれ自体の内においてばかりでなく、他の存在との間にも内的原因と外的結果の相対関係を結ぶことによって初めて存在するようになる。この原理原則が働いている系の中で、個々の質の基準を高め正常化をはかり相互のバランスを

維持していこうとする能力こそ恒常性維持機能といわれるものである。この能力は各個人が保護・維持・管理・処理という内容の注意力をフルに働かせることによって開発されていくのである。

特に家庭はこの注意力を育てる為に正常化のモデルとして機能していかなければならない。個人完成は心（宗教性）と体（科学性）を融合し、創造性が自己発現するに至るような力（万有原力、法）との一体性を求めることから始まるのである。これを育成し、開発するためにすでに個人完成した親によって、保護する安全圏を提供する段階的期間が家庭に命ぜられている。

このような視点で家庭をみるならば、生活の向上という有形的価値を追求するより、個人完成を促す家庭の正常化を考えることが優先されるべきである。

すべての生活する人に、均衡教育としての家政学が必須な教科として位置づけられることが望ましい。

引用文献

- 1) 『家政学将来構想』 日本家政学会編 光生館 1984 pp.6~28
- 2) 『家政学雑誌』 辻啓介 1993 vol 44 No.7, p.599
- 3) 『東洋学術研究』 加藤尚武 1993 vol 32 No.1, pp.82 ~102
- 4) 『東洋学術研究』 村上陽一郎 1993 vol 32 No.1, pp.22~35
- 5) 『共栄学園短大紀要』その2 樋口眞基子 1994 vol 10, pp.109~119
- 6) 『家政学雑誌』 杉田浩一 1991 vol 42, No.4, p.391
- 7) 『家政学雑誌』 富田 守 1993 vol 4 No.2, 1993 p.65

参考文献

- 1) 『家政学成立史』 常見育男 光生館 1971.9
- 2) 『家政学総論』 田辺義一著 “ 1984.4

- 3) 『家政学の間違い』 ローラ・シャピロ 種田訳
晶文社 1991.5
- 4) 『ヘブラニズムとヘレニズム』 並木浩一 新地
書房 1985.5.
- 5) 『東洋学術研究』 1993 vol 32.No1 東洋学術
研究所
- 6) 『東洋学術研究』 1994 vol 33 No1 東洋学術
研究所
- 7) 『家政学雑誌』 1991 vol 42 No.4,12,17 1993
vol 44, No.2,7,11,46 1994 vol 45 No.5 家政学
会
- 8) 『いまの食生活では早死にする』 今村光一 経
済界 1993.9